

お答えを差し控えさせていただきます  
——山村調査「採集手帖」における不記載項目——

川 田 牧 人

## 1. 「採集手帖」に記載されなかったこと

成城大学民俗学研究所は2023年に創設50周年を迎え、その記念特別展として「『採集手帖』の時代—柳田國男主導の共同調査の試み—」が11月2日から12月22日にかけて開催された。この展示では「採集手帖」、すなわち1934（昭和9）年から1936（昭和11）年の三年間にわたって柳田國男が主導した「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」の際に用いられた調査・質問項目集（クエスチョネア）である『郷土生活研究採集手帖』から展開していった民俗学的共同調査の足取りが展示されており<sup>(1)</sup>、好評を博した。本稿はこの「採集手帖」を基礎資料として用いながら、日本における生活総合調査の嚆矢とされる一大プロジェクトにおいていかなる調査が実施され、その調査項目がどのように活用されたのか、あるいは逆に十分に活用されなかった調査項目とその意味について検討することを目的としている。

柳田主導による調査研究プロジェクトとして、日本全国から数十地点を選び出して調査対象村とし、同一の調査項目による比較共同調査がおこなわれた1934～1936年の調査、いわゆる「山村調査」については、これまで学史的重要性を指摘する検討が多くなされてきた。たとえば福田アジオは、調査の実施後に公表された報告書を編集した『山村海村民俗の研究』における解説の形で、「山村調査」のあとに続けておこなわれた「海村調査」とあわせて、これらの調査プロジェクトがその後の民俗学研究にどのように寄与したか、「採集手帖」にはどのような機能がありどのように使用されたか、100に及ぶ調査項目がどのように構成されており、またどのように変遷していったかについて検討を加えるなど、詳細に論じている〔福田1984〕。三年間の調査項目の変遷については田中宣一もとりあげており、それ以外にも調査期間の時間的制約や「心意」に達する調査の困難などを指摘しつつも、総じて民俗学研究に一大転換点をもたらしたものであるという評価を与えている〔田中1985〕。矢野敬一は「山村調査」の思想・認識的背景として「農村衰微」といった問題意識や、生活を語ることばへの注目がみられることを指摘している〔矢野1992〕。

また100を数える調査項目の内容から特定の項目に着目し、個別の研究主題としてどのように深化していったかを検証するような研究も少なくない。たとえ

ば山田慎也は葬送習俗を焦点化させ、昭和9年度の53～58項目が、昭和10年度の51～56項目、昭和11年度の63～68項目へと変化していく過程を追いかけて、実際の記載事項や不記載項目についても検討を加えることによって、「人生儀礼」というトピックが民俗学研究の重要な主題としてせり上がっていく様相を描き出している〔山田2011〕。松田睦彦は人の移動に着目し、日常的な移動を民俗学で扱うことの困難の理由として、「非常民」への注目が肥大したために普通の人びとの移動への注目がかすれた点、特定の地域に根ざした伝承母体を単位とする個別分析法によって、その単位を超える人の動きを捉え損なった点などを指摘している。この文脈のなかで昭和11年度の14～16項目などから、調査の意図として村外世界との交流をダイナミックに捉える視点が見いだされるというのが松田の主張である〔松田2015〕。

このような個別項目への注目という動向のなかで、百項目の最終項目「仕合わせのよい家柄」について着目した関一敏は、以下のように述べている。「しあわせの民俗誌、という耳なれない表題の由来は、いわゆる山村調査採集手帖の質問のうち、最後の百項目に「仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし」とあることへの驚きでした。現在、成城大学民俗学研究所に所蔵されている、報告された手帖を閲覧すると、当時の調査者たちもこの百項目にはずいぶんととまどいを覚えたらしく、まず空欄が多いのです」〔関1993: 339〕。ここでは関は100番目の項目に白紙不記載が目立ったことに注目しているが、調査員がとまどいを覚え、またインフォーマントも答えにあぐねた項目はこれ以外にもあったのではないだろうか、という素朴な疑問が生まれる。橋本裕之は別の調査項目「笑はない人がいますか」それ自体をタイトルとする論考において、「調査員が『採集手帖』を携帯しながら、「笑はない人がいますか」や「よく笑ふ癖のある人はありませんか」という質問を連発していたとしたら、それはかなり奇妙な光景であったはずである」〔橋本2015: 33〕と記し、やはり不記載項目としての可能性を示唆している。

このように不記載項目は、民俗調査がその後、総合的に体系化されていく途上で、うまい具合に組み入れられず弾かれてしまった項目だといえるかもしれない。しかしその一方で、人びとの生活の実相を捉えるのに不要な項目では決してないはずだ。なぜなら調査の企画段階で、あえて100の項目にかぎって調査

の内実を絞り込むにはかなり厳密なセレクションがなされたはずであり、調査期間であったわずか三年のあいだに項目の削除や追加、項目間の統合や入れ替えなどが細かく行われる過程もへているのである。特定の項目が不記載であった根拠や影響は個別に考察されるべきであろうし、また削ぎ落とされていった項目からその後の民俗調査の「総合的な体系化」を逆照射できるかもしれない。それ以前に、「採集手帖」には実際に何が記載されていたのかを知ることも重要であるが、それと同等に「何が記載されなかったのか」の実態を詳らかにする必要があると考える。

そこで本稿ではその対象として、成城大学民俗学研究所に保存されている「採集手帖」68冊をあつかう。民俗学研究所に保存されている「採集手帖」は69番まで番号が付されているが、その51番が欠番となっているため、全68冊が対象である。「採集手帖」を用いて調査が実施されたのが68ヶ村ということになるのだが、山村調査の総括として出版された『山村生活の研究』によると、正式には52ヶ村、その他14ヶ所で、合計66地点が調査地となったことが記されている。その齟齬については、【表1】に示したが、具体的には以下の通りである。

まず『山村生活の研究』に記載された調査地のうち、下記の4ヶ所の「採集手帖」は保存されていない。

七、神奈川県津久井郡青根村（昭和九年度調査）

一七、広島県山県郡中野村（同上）

三四、愛媛県北宇和郡御楨村（昭和十年度調査）

其他一四、鹿児島県大島郡徳之島亀津村

逆に、『山村生活の研究』の調査地一覧にはあげられていないが、「採集手帖」が保存されている調査地がやはり4ヶ所ある。

採集手帖番号18番 富山県西礪波郡太美山村刀利

採集手帖番号24番 長野県南安曇郡安曇村大野川

採集手帖番号65番 鹿児島県大島郡十島村黒島

採集手帖番号66番 鹿児島県大島郡亀津村井之川

ただし65番の黒島は、「三島村」として『離島生活の研究』に収録されている。また採集手帖52番の愛媛県東宇和郡惣川村は、『山村生活の研究』では「北宇和郡」として其他七番に数えられている。また、『山村生活の研究』三一番の大阪

表1 「採集手帖」一覧表

番号	調査地	調査者	調査実施年度	『山村生活の研究』の番号
1	青森縣西津輕郡赤石村	後藤興善	昭和11年度	三七
2	岩手縣九戸郡山形村	大間知篤三	昭和10年度	二二
3	山形縣最上郡安樂城村	山口貞夫	昭和9年度	一
4	秋田縣北秋田郡荒瀬村	杉浦健一	昭和10年度	二三
5	宮城縣伊具郡筆甫村	橋浦泰雄	昭和10年度	二四
6	福島縣大沼郡中ノ川村	杉浦健一	昭和9年度	二
7	茨城縣多賀郡高岡村	大間知篤三	昭和9年度	三
8	千葉縣香取郡久賀村	大藤時彦	昭和11年度	三八
9	千葉縣君津郡龜山村	瀬川清子	昭和9年度	四
10	栃木縣安蘇郡野上村	倉田一郎	昭和10年度	二五
11	群馬縣利根郡赤城根村・東村	守隨一	昭和11年度	三九
12	群馬縣多野郡中里村	杉浦健一	昭和11年度	四〇
13	群馬縣利根郡品川村花咲	牧田茂	昭和11年度	その他二
14	埼玉縣秩父郡浦山村	佐々木彦一郎	昭和9年度	五
15	東京府西多摩郡檜原村	大藤時彦	昭和9年度	六
16	新潟縣東蒲原郡東川村	最上孝敬	昭和10年度	二六
17	富山縣東礪波郡上平村	最上孝敬	昭和11年度	四一
18	富山縣西礪波郡太美山村刀利	石崎直義	昭和9年度	——
19	石川縣珠洲郡若山村	小寺廉吉	昭和9年度	八
20	福井縣大野郡五箇村	橋浦泰雄	昭和11年度	四二
21	福井縣丹生郡城崎村	佐々木彦一郎	昭和9年度	九
22	長野縣更級郡信級村	守隨一	昭和9年度	一〇
23	長野縣上伊那郡美和村	最上孝敬	昭和9年度	一一
24	長野縣南安曇郡安曇村大野川	今井武志	昭和11年度	——

番号	調査地	調査者	調査実施年度	『山村生活の研究』の番号
25	長野縣東筑摩郡洗馬村	小澤寛夫	昭和9年度	その他四
26	長野縣更級郡諸村	宮本邦基	昭和11年度	その他三
27	山梨縣東八千代郡中芦川村	金城朝永	昭和9年度	一二
28	静岡縣周智郡氣多村	橋浦泰雄	昭和9年度	一三
29	静岡縣賀茂郡中川村	佐々木彦一郎	昭和10年度	二七
30	岐阜縣揖斐郡徳山村	櫻田勝徳	昭和10年度	二九
31	岐阜縣大野郡丹生川村	村田祐作	昭和11年度	その他五
32	愛知縣北設楽郡振草村	瀬川清子	昭和10年度	二八
33	三重縣飯南郡森村	最上孝敬	昭和9年度	一四
34	和歌山縣日高郡上山路村	倉田一郎	昭和9年度	一五
35	和歌山縣有田郡上湯川村	濱口彰太	昭和11年度	その他六
36	奈良縣吉野郡天川・宗檜・大塔・野迫川村	宮本常一	昭和11年度	四三
37	奈良縣吉野郡野迫川村	横井照秀	昭和11年度	四三?
38	滋賀縣愛智郡東小椋村	關敬吾	昭和10年度	三〇
39	京都府北桑田郡知井村	守隨一	昭和11年度	四四
40	大阪府泉南郡西葛城村	織戸健造	昭和10年度	三一
41	大阪府泉南郡東信達村葛畑	山口康雄	昭和10年度	三一
42	兵庫縣佐用郡石井村	河本正義	昭和9年度	一六
43	鳥取縣東伯郡小鹿村	山口貞夫	昭和10年度	三二
44	島根縣仁多郡八川村	杉浦健一	昭和10年度	三三
45	岡山縣阿哲郡上刑部村	櫻田勝徳, 瀬川清子	昭和11年度	四五
46	山形縣西置賜郡北小国・小國本・南小國村	大島正隆	昭和11年度	その他一
47	山口縣阿武郡嘉年村	橋浦泰雄	昭和11年度	四六

番号	調査地	調査者	調査実施年度	『山村生活の研究』の番号
48	香川縣三豊郡五郷村	瀬川清子	昭和11年度	四七
49	徳島縣海部郡木頭村	杉浦健一	昭和9年度	一八
50	高知縣高岡郡禰原村	橋浦泰雄	昭和9年度	一九
51	51 欠 番	—	—	—
52	愛媛縣東宇和郡惣川村	那田和三郎, 岩本政一	昭和10年度	その他七 (北宇和郡)
53	愛媛縣北宇和郡下灘村	赤松則房	昭和10年度	その他八
54	福岡縣京都郡伊良原村	山口貞夫	昭和11年度	四八
55	佐賀縣東松浦郡嚴木村	橋浦泰雄	昭和10年度	三五
56	長崎縣東彼杵郡萱瀬村	杉浦健一	昭和11年度	四九
57	長崎縣南松浦郡久賀島村	瀬川清子	昭和10年度	三六
58	大分縣玖珠郡万年村	關敬吾	昭和9年度	二〇
59	熊本縣球磨郡神瀬村	最上孝敬	昭和11年度	五〇
60	宮崎縣兒湯郡西米良村	倉田一郎	昭和11年度	五一
61	鹿兒島縣肝属郡百引村	櫻田勝徳	昭和9年度	二一
62	鹿兒島縣出水郡大川内村	大間知篤三	昭和11年度	五二
63	鹿兒島縣大島郡十島村硫黄島	稻江清二	昭和9年度	その他九
64	鹿兒島縣大島郡十島村口之島	林萬壽郎	昭和9年度	その他一〇
65	鹿兒島縣大島郡十島村黒島	林萬壽郎	昭和11年度	—
66	鹿兒島縣大島郡龜津村井之川	加藤繁満	昭和9年度	—
67	鹿兒島縣大島郡十島村小寶島	南繁隆	昭和9年度	その他一一
68	鹿兒島縣大島郡大和村	城和洋	昭和9年度	その他一二
69	鹿兒島縣大島郡宇檢村	中島吉應	昭和9年度	その他一三

※民俗学研究所所蔵の「採集手帖」は69番まで、うち51が欠番となっており、全部で68冊ある。「番号」には民研の整理番号を付した。

府泉南郡東信達村・西葛城村については「採取手帖」は2冊（40番大阪府泉南郡西葛城村，41番大阪府泉南郡東信達村葛畑），四三番の奈良県吉野郡天川村其他，ならびに奈良県宇陀郡曾爾村其他も2冊（36番奈良県吉野郡天川・宗檜・大塔・野迫川村，37番奈良県吉野郡野迫川村）<sup>(2)</sup>保存されている。

このように民俗学研究所保存の「採集手帖」と『山村生活の研究』での総括は、調査地とその数や地名に微妙な齟齬が生じているが、本論文では、民俗学研究所に保存されている「採集手帖」68冊全部を対象として検討を加えることとする。

## 2. 百項目の記載実態

この節では、「採集手帖」現物68冊を対象とした調査について説明する。先にも少し示したが、「採集手帖」は昭和9年5月，昭和10年5月，昭和11年4月と三つのバージョンがあり，毎年100の調査項目で構成されていることには変わらないが，その内容や文言，順序などは毎年変わっている。民俗学研究所に保存されている68冊の内訳は，昭和9年版を使用したものが27冊，昭和10年版が18冊，昭和11年版が23冊である。このうち整理番号60番宮崎県児湯郡西米良村は調査そのものは昭和11年度におこなわれているが，昭和10年版が使用されているため，昭和10年分として整理する。

「採集手帖」の体裁は，昭和9年版では，内表紙をめくった次のページから「趣意書」，「郷土生活研究所同人」「採集地・採集者・話者」の記載ページ，そして「採集上の注意」と続き，その後，調査項目となる。昭和10年版では「郷土生活研究所同人」と「採集地・採集者・話者」の間に「索引」の見開きページが挿入され，100の調査項目が短句で一覧できるようになっている。さらに昭和11年版では，「郷土生活研究所同人」のページが割愛され，「趣意書」の直後に「索引」がおかれている。「採集上の注意」は毎年書き換えられており，その詳細はここでは立ち入って検討しないが，興味深い点の一つだけあげる。それは，昭和11年版にある「質問は標準の形にしてありますから土地によって加減して聞いて下さい。注釈は質問の全体的説明ではなく，補助として付加したものです」〔現代当用漢字に変換〕という記述である。これは百項目を均等に聞き取りする必要はなくフィールドや話者の状況に応じて取捨選択して調査するよという指示だった。調査三年目にはじめてこの注意事項が明記されたこと

は、不記載項目にも少なからず影響を与えた。後に詳しくみるが、百項目すなわち100ページの手帖のうちの白紙のページは、昭和9年度は338ページ(12.52%)、昭和10年度は226ページ(12.56%)であるのに対して、昭和11年度は438ページ(19.04%)に上っている。年ごとの改善によって、この「採集手帖」が単純な一問一答式の質問紙としてではなく、調査員が取捨選択しながら話を深く聞くきっかけとして使われるように次第に進化していったことがわかる<sup>(3)</sup>。

この記載内容を詳しく見てみよう。「採集手帖」はタテ書き仕様で、見開きの左側ページに調査項目が1ページずつ印刷されている。そのページの上部には、調査項目番号と調査地記入欄(県郡村)、調査日(年月日)、調査者を書き込む欄が設けられている。右側ページには何も印刷されておらず、前ページでの聞き書きが長いときには、改ページして右側ページに続けて書いている調査員が多い。単純に考えると、見開き右側のページに調査項目が印刷されていれば、左右の見開きページを丸々使えるのではないかとも思われるが、このような様式は、「柳田の一つの構想」であったことを、福田アジオは次のように指摘している。「柳田は調査結果を100枚のカードにすることを考えていたのである。日本各地からの調査結果を100枚のカードにして、番号ごとに集めれば、一つの質問に対する各地の結果がたちどころに比較できるというもので、彼が『民間伝承論』で構想した重出立証法を具体化する資料獲得方法であったことが判明する」[福田2009: 125]。つまり1ページずつ切り離して項目ごとに集計するときは、「採集手帖」のページがカードとして機能するということである。現在保存されている形態は「手帖」として綴られたままであり、各ページがばらされた形跡はないので、じっさいにはそのような使い方はされなかったのだが、この指摘は、梅棹忠夫の野外調査における知的生産技術にきわめて近いものがある。「一ページ一項目という原則を確立し、そしてページの上欄に、そのページの内容をひと目でしらせる標題をつけることにした。いくらみじかい記事でも、内容がかわれれば、つぎのページにすすむ」[梅棹1969: 31]といったノートの使い方や、それをカード化するためのルーズリーフやフィラーノートについての指摘、つまり「じつは一種のカードなのである。…それは、ページのとりはずし、追加、くみかえが自由にできるようになっている。そして、そのつかいかたににおいても、項目ごとにページをあらためる、あるいは片面だけを使用する、と













その質問がなされたが、話者がありなしだけで答えて具体的な話は聞かれなかったことが類推される。それに対して×項目は完全な白紙であり、話者がたとえば「そんな話はうちの村ではないよ」と答えたため白紙のままにした場合もあるかもしれないが、むしろ先の関の指摘のように調査員自体がその質問項目に対して「ずいぶんととまどいを覚えた」ため、その項目自体をとばして調査した可能性も考えられるのである。

したがって表2の整理だけでは不十分であり、三年間の調査項目を置換できるようにした上で、その累積を不記載率だけにしぼって検討する必要が生じるのである。

### 3. 調査結果（不記載項目のランキング）

そこで、項目内容ごとの不記載率を算出しなければならないのだが、項目番号ごとの単純な集計だけやっても意味はない。先にも書いたように、三年間の調査項目は削除や追加、順序の入れ替えなどの修正が細かくおこなわれているからである。たとえば前節で紹介した不記載率の高そうな項目では、昭和11年度の第28項目「村の公と私とはどんな場合に明白に現れますか」は、昭和9・10年度では第98項目「村の公と私を表す言葉がありますか」が対応する。では昭和11年度の第98項目は何かというと、「疲労とか衰弱を表わす言葉がありますか」であり、これは昭和9年度では第82項目、昭和10年度では第79項目である。このように項目番号だけに頼っていても、同一内容の調査項目が三年間でどれほどの不記載となっているかは算出できない。

この三年間の調査項目間の対応に関しては、福田アジオと田中宣一がそれぞれその変遷を追っており、どちらも一覧表を提示して詳細に検討している〔福田1984、田中1985〕。これらの研究成果を利用して、三年間の項目の対応を一覧化したものが【表3】である。この表は、昭和11年度の調査項目順を最終の着地点として設定し、その最終着地点にいたる昭和9、10年度の質問項目は何であったかを対応させる形で作成した<sup>(4)</sup>。たとえば、質問項目1番から6番までは三年間順序のそのままに変更はないが、昭和11年度の7番は昭和9、10年度では96番、8番は前二年は95番であった。17番は昭和11年度に新たに追加された項目で、前二年は対応する項目はないので空欄となっている。23番は前二年は

表3 三年間の項目対応表

S9	S10	S11	S9	S10	S11
1	1	1	15, 20	15, 19	26
2	2	2	20	21	27
3	3	3	98	98	28
4	4	4			29
5	5	5	94	94	30
6	6	6			31
96	96	7	22	21, 22	32
95	95	8		23	33
7	7	9	23	24	34
8	8	10	24	25	35
9	9	11	25	26	36
10	10	12		27	37
11	11	13	26, 27	28	38
12	12	14	28, 29	29, 30	39
13	13	15	30	31	40
14	14	16		74	41
		17	84	83	42
16	16	18	32, 33	33	43
31	32	19			44
17	17	20		34	45
	18	21	34, 35	35	46
18	19	22	36	36	47
91, 92, 93	91, 92, 93	23	37	37	48
		24	38	38	49
97	97	25	39	39	50

S9	S10	S11	S9	S10	S11
40	40	51	86, 87	86, 87	76
41	41	52	88	88	77
43	42	53			78
42, 89, 90	89, 90	54	85	84	79
44	43	55		85	80
45	44	56	64	62	81
46	45	57	83	80	82
47	46	58	77	73	83
48, 49	47	59	67	65	84
50	48	60	68	66	85
52	50	61	65, 66	63, 64	86
51	49	62	75, 76	72	87
54	52	63	71	69	88
	51	64	72, 73	70	89
53	53	65	74	71	90
55	54	66	81	78	91
56, 57	55	67			92
58	56	68	78	75	93
	82	69	80	77	94
	81	70	79	76	95
60	58	71	69	67	96
61	58, 59	72	70	68	97
59	57	73	82	79	98
62	60	74	99	99	99
63	61	75	100	100	100

91番・92番・93番と分かれていたものが三年目に一項目として統合された。このように対応関係を明らかにした上で各年度の記載実態を最終着地点の昭和11年度版の質問項目に置換していく作業シートとして表3を用いることができる。

この表を用いて置換作業をし、各項目の不記載の件数、ならびにその比率を算出したものが【表4】である。この表の「件数」の欄は、各項目の三年間の不記載の数を総計したもので、各年一項目ずつの場合、分母は68であるがそれは省略してある。途中で追加された項目、たとえば17番は昭和11年度のみのもので23ヶ所の調査地のうち3ヶ所で不記載であったという意味で3/23と表記してある。前年度までの複数項目を統合した調査項目、たとえば23番は、昭和9、10年度の91番・92番・93番が対応しているので、その項目のカウントも加算すると対象村落の母数もそれだけ増えるので、30/158となる。この要領で昭和11年度版の項目に置換する形で不記載数を累計していった、その割合をパーセンテージであらわすと、各項目の不記載率が算出された。

この結果、百項目調査において、調査員がもっとも記載しなかった項目は、37番「笑わない人がいますか」であり58.53%つまり半数以上の「採集手帖」で白紙となっていた。続いて、100番「仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし」(48.52%)、28番「村の公と私とはどんな場合に明白に現われますか」(42.64%)の順となるが、1位と2位のあいだに10%以上の差がついている。以下20位までを列挙したものが【表5-1】である。

逆に不記載率が低かったもの(つまり回答率がよかったもの)の順位も一目瞭然であり、こちらの1位は80番「山の神様はどんな所にあつて、何時どんな祭りをしますか。どんな神様だと云いますか」で、この項目は不記載率0%、つまり調査員全員が何らかの回答を記載していることを意味している。続いて、9番「どうしても外から買わなければならぬものは何々ですか」と20番「村の人等が互に共同して作業するのはどんな場合ですか」がともに1.47%、68冊のうち白紙だったのは1冊だけ、という結果となっている。これも上から20項目を目処に(18位が複数あったので正確に20項目ではないが)【表5-2】のような一覧表にすることができる。

これらの結果から、民俗学的共同調査が立ち上げられていった経緯や、その後の民俗調査で重要となった調査項目の成り立ちなど、多くのことを読み取る

表4 百項目の不記載率表

S11項目番号	件数	不記載率 (%)	S11項目番号	件数	不記載率 (%)
1	5	7.35	29	6/23	26.08
2	10	14.7	30	6	8.82
3	6	8.82	31	2/23	8.69
4	4	5.88	32	17/86	8.13
5	7	10.29	33	6/41	14.63
6	3	4.41	34	8	11.76
7	9	13.23	35	20	29.41
8	18	26.47	36	13	19.11
9	1	1.47	37	24/41	58.53
10	2	2.94	38	20/95	21.05
11	3	4.41	39	7/113	6.19
12	5	7.35	40	14	20.58
13	2	2.94	41	6/41	14.63
14	2	2.94	42	15	22.05
15	12	17.64	43	18/95	18.94
16	17	25	44	2/23	8.69
17	3/23	13.04	45	2/41	4.87
18	2	2.94	46	7/95	7.36
19	10	14.7	47	15	22.05
20	1	1.47	48	17	25
21	3/41	7.31	49	5	7.35
22	7	10.29	50	23	33.82
23	30/158	18.98	51	3	4.41
24	3/23	13.04	52	4	5.88
25	7	10.29	53	6	8.82
26	17/113	15.04	54	11/140	7.85
27	6	8.82	55	6	8.82
28	29	42.64	56	3	4.41

S11項目番号	件数	不記載率 (%)	S11項目番号	件数	不記載率 (%)
57	6	8.82	79	17	25
58	4	5.88	80	0/41	0
59	7/95	7.36	81	18	26.47
60	8	11.76	82	27	39.7
61	4	5.88	83	4	5.88
62	2	2.94	84	6	8.82
63	2	2.94	85	9	13.23
64	2/41	4.87	86	24/113	21.23
65	5	7.35	87	34/95	35.78
66	4	5.88	88	11	16.17
67	9/95	13.23	89	18/95	18.94
68	15	22.05	90	20	29.41
69	9/41	21.95	91	12	17.64
70	5/41	12.19	92	8/23	34.78
71	5	7.35	93	6	8.82
72	5/86	5.81	94	21	30.88
73	9	13.23	95	2	2.94
74	17	25	96	11	16.17
75	16	23.52	97	12	17.64
76	16/113	14.15	98	15	22.05
77	17	25	99	18	26.47
78	4/23	17.39	100	33	48.52

※母数が68の場合は、分母68を省略し、件数のみを記載した。昭和9年、10年の複数項目を合算した場合は、(件数/その総数を分母)で表記した。

ことも可能であろう。しかしそのような考察を施す前に、本稿がそもそも不記載項目を主題とするものであること、その点では不記載率第1位の37番項目が2位以下を大きく引き離していることなどから、半数以上の調査員があえて何の記載もしなかった「笑わない人がいますか」という項目について、逆照射

表5-1 不記載率が高い順のランキング

順位	不記載率 (%)	項目番号	内容
1位	58.53	37	笑わない人がいますか。
2位	48.52	100	仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし。
3位	42.64	28	村の公と私とはどんな場合に明白に現われますか。
4位	39.70	82	若い人たちの中に神信心の深い人がありませんか。
5位	35.78	87	氏神様、先祖様、屋敷神の力で助けられたという話がありますか。
6位	34.78	92	神の意思を知ったり、古凶をトったりする方法、技術について承りたし。
7位	33.82	50	奉公人や日雇いの居りやすい家というのがありましたか。
8位	30.88	94	氏神様や他の神仏に何とって拝むかを人に言ってきかせることは出来ませんか。
9位	29.41	35	義理固いと云うのは一族の気風によりますか、家風ですか、或は只一人一人の気質によりますか。
		90	妖怪、変化、狐狸その他色々の魔物を避ける手段というもの何かありましたか。
11位	26.47	8	山小屋での作法を承りたし。
		81	土地の人で古く神に祀られている人がいますか。
		99	代々長生をする家筋がありますか。
14位	26.08	29	昔は家の格式と云う様なものが重んぜられましたか。
15位	25.00	16	外に久しく出て居て此頃帰って居る人がいますか。
		48	農業や山仕事に他村から手伝に来てくれる場合がありますか。
		74	祭礼の前に特に慎まねばならぬことがありますか。
		77	以前の庄屋（名主）さんの家は今でも神社と特別の関係がありますか。
		79	他所へ出て居る者が氏神様へ御参りをしに来ることがありますか。
20位	23.52	75	祭礼の慎みは人によってちがいが有りますか。

表5-2 不記載率が低い順のランキング

順位	不記載率 (%)	項目番号	内容
1位	0.00	80	山の神様はどんな所にあつて、何時どんな祭りをしますか。どんな神様だと云いますか。
2位	1.47	9	どうしても外から買わなければならぬものは何々ですか。
		20	村の人等が互に共同して作業するのはどんな場合ですか。
4位	2.94	10	買物には通例どこへ出ましたか。
		13	明治以後に新たに村の人になった人がありますか。
		14	出稼には今までどの方面へ多く出ましたか。
		18	講にはどんな種類がありますか。
		62	花嫁はどの入口から家に入り、先ずどの部屋におちつきますか。
		63	葬式の時棺はどの口から出しますか。
		95	雨乞はどのような風にしますか。風祭り、おてんき祭り、虫祈禱などもありますか。
11位	4.41	6	村で新しく始まった職業は何と何ですか。
		11	物売りや仲買人が入って来ますか。
		51	たべ物の良い悪いということを言いますか。
		56	ミヤゲはどのような時に配りますか。
15位		45	女の仕事ときまっているものは何々ですか。
		64	忌中の行事を承りたし。
17位	5.81	72	氏神様の御きらいになるというもの何かありますか。
18位	5.88	4	村の暮しの最も楽であったのはいつ頃でしょう。
		52	かわり物（特殊食物）をこしらえる日は現在ではどれ位ありますか。（出来るだけ多く承りたし）
		58	仕事着は仕事の種類によっておおよそきまって居ますか。
		61	正月に一番大きな門松（又は門柱）を立てるのはどの入口ですか。
		66	盆の仏迎えは埋めた所へ行きますか。寺へ行きますか。
		83	この土地で今最も多く信心せられて居る神仏は何様ですか。

ともいえる見方をしておこう。つまり、何らかの記載があった「採集手帖」には、この項目には何が記載されていたか、である。この項目に記載があるのは17冊だけであるので、以下、記載を拾ってみる（■は判読不能文字）。

「なし」（1番、青森県西津軽郡赤石村）

「蒲田アキはオドケ上手である。オドケ者が多い。こっけいな真似が上手である。頓智があつて人を笑はせる。人を笑はしておいて、自分は一寸笑うという風である。その一人が、村へはじめてゲートルが輸入された頃、買って履いて戻った。上から巻きはじめて履いていた。カカーが下から巻き上げるものだらうにと言ったら、突嗟に言ふには、「馬鹿、どういふ風だと思ってまいてみた」。この調子である。（清水政男氏談）」（2番、岩手県九戸郡山形村）

「特別によく笑ふとか、笑はぬと云ふやうな人もないやうだ。」（5番、宮城県伊具郡筆甫村）

「○人を見ると笑ひ、大食をすると笑ふという（X：伏字）のこと、三十六間にあり。彼はいつも満足して、人を見ると笑はずにをれぬといふ。気狂ひではないのだが。（作原）

○決して口論などしない人に、しゃべるのが上手で、人を一寸でも笑はすヒョーキな人がある。（小戸）」（10番、栃木県安蘇郡野上村）

「△女の人たち写真をとらうとするとクスクスと笑ふ。

わさい女子たちは殊にそちらの風が激しい。それは恥しくて笑ふのでショーシイといふ。ショーシイとは恥しいの意。「笑止しい」の字をあてるのだといふ。（加藤千代氏に聞く。二十三才）

△をかしくないのををかしい振りして笑ふのはソラワラヒ、笑ふインネンないのに強ひて笑ふのはクルシワラヒといふ。にが笑ひとは別。（清野万穂）

△■■村九島にタガ職で笑はぬ事で評判とった人がある。ふだんキチツとした顔してゐて、よほどをかしいことでないと笑はぬ笑ったとて苦笑ひのやうな笑ひ方をする。（清野万穂）

△俺の舎弟笑はない。草履くれるから笑へといつてもをかしくないとして笑はぬ。アメくれるから笑へといつてもをかしくないといふ。（遠藤トリ）

△反対に俺の二番舎弟はよく笑ひ、人を笑はした。夫婦喧嘩があるととびだし

ていって、笑はしてしまふ。鍛冶屋の前へいって、トッテンタンニャー ビーボビーボビーボ シャッキンシャッキンとおどけていた。(同上)」(16番, 新潟県東蒲原郡東川村)

「特別にこんな人は■き僧(増か?)えてゐない。」(20番, 福井県大野郡五箇村)

「同■ 人を笑はせる人(坪井正五郎氏) 笑いの問題全般  
何が村人のをかしいか イ. 作害の笑ひと ロ. 受身のわらひ」(30番, 岐阜県揖斐郡徳山村)

「笑ふ事の少い人はあるが、全くわらはぬ人はない。

さういつも笑ふ人もない。」(32番, 愛知県北設楽郡振草村)

「大井野の新宅(?)といふ家に大笑のするひょうげた男がゐた。此人は、八十何才で死んだ。(大井野河原杉次郎)」(45番, 岡山県阿哲郡上刑部村)

「特になし。」(47番, 山口県阿武郡嘉年村)

「笑はない人はない。話好きで有名な人がある。」(48番, 香川県三豊郡五郷村)

「知野に矢取義光といふて笑はぬ人がある。」(52番, 愛媛県東宇和郡惣川村)

「目立ってどうといふ人はありません」(53番, 愛媛県北宇和郡下灘村)

「特に目立つ程の人はないが、概して女の方によく笑ふ人が多い。(天川)」(55番, 佐賀県東松浦郡巖木村)

「ない。娘は笑ふが。」(57番, 長崎県南松浦郡久賀島村)

「笑ふ癖は女に多い。二三人よると、他人がゐても遠慮なく笑ふ。」(60番, 宮崎県児湯郡西米良村)

「別ニナシ」(65番, 鹿児島県大島郡十島村黒島)

最後に、昭和9年度の調査対象からもひとつだけ見ておこう。

「昔…太鼓を上手に打つ人があって評判であった。

今…漫才、阿呆陀羅などの上手なものがある。」(18番, 富山県西礪波郡太美山村刀利)

これは昭和9年度版第25項目として掲げられていた「変人とか奇人とか言われる人がありましたか」という質問に対する回答である。「笑わない人がいますか」という項目は昭和10年度に新たに追加されたものであるので、この年には項目としてはなかった。上記の太美山村刀利の「採集手帖」には、調査員で

ある石崎直義による上記の記載とは別の筆跡で書き込みがあり<sup>(5)</sup>、「笑わない人がありますか」「特によく笑う癖のある人はありませんか」と追加項目が示されている。翌10年にその項目が新たに追加されたことを考えると、そのパイロット・ケースとしてみなされていたことも考えられるが、この昭和9年度第25項目の「奇人変人」の項目は、昭和10年度には第26項目、昭和11年度版では第36項目として三年間を通して継続して調査され、『山村生活の研究』においても倉田一郎が項目の一部としてとりあげている〔柳田編1975：205-207〕。すなわち、「口頭伝承に表れた村の人物」の「(1)人物の類型」において、その類型を(イ)能動型、(ロ)退嬰型のふたつに分ける。さらに(a)生理型、(b)智能型、(c)芸(技)能型の三つの下位区分を設け、百項目の「奇人変人」でふれられていた大力・大食は(イa)、おどけ者は(イb)、歌の上手は(イc)のそれぞれ実例として分類されている。「他人をよく笑わせる人」について直接の記載はないが、頓智、芸達者、曲芸上手などの実例は取り上げられており、民俗社会の中で何らかの技芸でもって笑いを提供することに対する注視は、あきらかに百項目調査全体としても重要性を帯びていたことが推察される。

#### 4. 若干の考察と展望

第1節でも述べたように、本稿の目的は「山村調査」の調査項目がどのように活用され、あるいは十分に活用されなかった調査項目とはどのようなものであったのかに関するデータを検証することを通して、それがいかなる調査であったのかを明らかにすることであり、具体的には「採集手帖」の実際の記載において白紙の多い不記載項目を抽出してきた。そもそもこのような統計上の集計をおこなうことを企図する際、前節で示したような集計結果が出ることは少なからず予測されたが、そこは論点先取にならないよう、この予測を前提とした立論はしてこなかった。しかし、不記載率のランキングをすべて順番通りの中させるまでにはいたらないものの、第37項目「笑わない人がありますか」がかなり高い不記載率を示すのではないかという見通しはあった。

筆者は近年、奄美大島における素人演芸である余興についてのフィールドワークを継続的に実施している。余興芸は現代では結婚式の披露宴で演じられるものが一般的であり、じっさいにコンテスト形式で余興芸が披露されるイベント

である Y-1 は結婚式披露宴の形式を演出に取り入れている。しかし余興や笑芸の源流は新郎新婦の友人による演し物に限られるものではなく、むしろそれよりさかのぼって、各集落の公民館での敬老会、青年団の演芸会、八月踊りの幕間など、民俗社会における儀礼や交流の場で披露される機会を得て親しまれてきた。このような笑い合いの場において生成される笑縁関係とでもいうべきものが筆者の現在の関心であるが、この主題を追究するにあたり、いかなる芸が演じられ、観衆のウケる／シラけるといった反応がいかにかに生じるかなど、問題関心は多岐におよぶのである。そしてこのような笑いに関するフィールドワークを構想する際に、山村百項目調査において、あるいはその後の民俗調査において、笑いはどのように「調査」されたのかという関心から、「採集手帖」では笑いはどのように記載されているのかという本稿の基本的着想にいたったわけである。そして、調査項目としては設定されているが、共同調査のとりまとめなどにおいて、あるいはその後の民俗調査の体系化においても、笑いという主題に対するじゅうぶんな展開がみられないことから、今回の不記載率の高さは、事前にうすうす予測されもしたのであった。

では、いかなる理由で第37項目は不記載が多かったのだろうか。これは第37項目に固有の問題として検討する必要があると同時に、資料 5-1 における不記載率の高かった項目に共通する全般的特徴としても考察しておく必要がある。いずれにせよ、調査者が質問しにくく、あるいは回答者が答えを差し控えてしまわざるを得ないような調査項目だったということは、それなりの根拠があることであろう。本稿の最後に、この点に若干の考察を加えたいが、まずは山村百項目調査全体において不記載が多かった項目の全般的傾向を見た上で、個別具体の問題を検討していきたい。

不記載率の高かった項目を先に資料 5-1 において示したが、資料 5-2 で示した不記載率の低かった項目、つまり質問しやすく答えやすかった項目との比較で考えてみるとその特徴がよくわかる。資料 5-2 の上位 3 項目は前節でも述べたように、以下の三つである。

- ⑧山の神様はどんな所にあつて、何時どんな祭りをしますか。どんな神様だと云いますか。
- ⑨どうしても外から買わなければならぬものは何々ですか。

⑳村の人等が互に共同して作業するのはどんな場合ですか。

これらはいずれも、実際の行動や現象をとまっていたり、視覚化・言語化が可能で明瞭に伝えることができる対象である。いかなる村人の立ち位置からでも一定の回答を得やすい調査項目、いわゆる「紛うかたなき」項目であるといえる。

これに対して不記載率の高い上位三つは、

㉟笑わない人がありますか。

㊱仕合わせのよい人又は家の話があるなら承りたし。

㊲村の公と私とはどんな場合に明白に現われますか。

であって、おもしろさや幸福感、公私の峻別のしかたなど、視覚化・言語化がむずかしく、感性や感覚にたよる判断を要するものであったり、人によって回答の仕方に差異が生じるような主観的な質問だったりする。「紛うかたなき」というより、かなり「ビミョーな」項目であるともいえよう。そもそも資料5-1にあげられた項目には「——の人はいますか」、「——のような出来事はありましたか」というスタイルが多く、個人に対する評価を含む質問、個別のケースについての語りを求める質問が多い。それに対して資料5-2のほうでは、「——の人はいますか」式の質問は、第13項目の「明治以後に新たに村の人になった人がいますか」だけであり、これととも、村の新参者は事実として客観的にわかるので回答しやすい。つまり、インフォーマントのパーソナルな情報や調査者の主観的判断にもとづく個別ケースなどについてたずねる項目は、不記載が多いのではないかという見通しが得られるのである。

これは見方を変えれば、集団を単位とするいわゆる「民俗」「習俗」「慣習」などに関する質問は発しやすいし回答を得やすいのに対し、「こういう人はいますか」といった個人的ケースに関する問いには答えにくいということになる。このことは近年の民俗学において指摘されてきたこととも整合性がある<sup>(6)</sup>。とりわけ民俗学における個人の取り扱いについて目を引くのは、『〈人〉に向きあう民俗学』のような研究の傾向である。この論集では、従来の民俗学において調査の現場では直接対峙している個人がスルーされて「伝承」のほうに焦点があたってしまう調査研究の根本的パースペクティブが卓越していたことが指摘され、「民俗学が他者に向き合う学問分野の一種であり、直接的に対峙した調査研究手

法を用いる分野であり続ける以上、「伝承」や「民俗」という無時間性の中に幽閉された既存の人間観は打破していく必要がある」[門田・室井編2014: 22] という主張がなされる。しかもこの個人への着目は「単に「目の前にいる話者の内面にも目を向けよう」というヒューマニズムではなく、分野横断的な議論に接続する」[門田・室井編2014: 34] ためである。つまり民俗学が学際的に拓かれるためには、個人において実現する事象に目を向ける必要があるわけだ。このような傾向が今後さらに進んで行くにつれて、「紛うかたなき」項目だけではなく「ピミョー」な項目へのアプローチも徐々に蓄積されてゆき、不記載率が高かった調査項目も少なくなっていくことが期待される。

もう一方の第37項目「笑わない人がありますか」に固有の問題、つまりなぜ笑いに関する項目は不記載率をもっとも高かったのかに関しては、先の不記載項目全般の問題よりは手強そうである。笑いについて、この百項目調査以降に調査項目化されたものがなく、比較して要因を探ることが困難だからである。ここまで述べてきた資料のみをもって性急に答えを出してしまうわけにもいかないかもしれないが、ヒントとなるような論考がないわけでもない。その一つは調査項目にあらわれる個人に着目した小池淳一のものである。笑いの項目は先にも述べたように百項目調査の第二年目、昭和10年より項目化されたものだが、その派生のものである奇人や変人などの異常（能力）人物に関する項目（昭和9年度の第25項目、昭和10年度の第26項目、昭和11年度では第36項目）について、「ここには、ある集団における逸脱者をひとまとめにして扱うというよりも、こうした伝承がある類型性を持っているであろうことを予想していると捉えることができる」[小池1989: 22] と指摘し、この類型性が話のネタとしての意義を帯びていたことにも言及している。ここから話はふたたび民俗学研究における個人の話になるのだが、小池の指摘によれば、民俗学において個人が注目されるのは、この類型性を見いだそうとする傾向性があるからであり、「それは個人への集団内での評価を入口として集団自体に迫ろうとしていたことと無関係ではない」[小池1989: 25]。どういう人が笑わせるか、どういう人が褒められるのか、どういう人が仕合わせがよいといわれるのか、という問いは、そのような評価を下す集団の基準はいかなるものか、という問題意識にもとづくものであったということだ<sup>(7)</sup>。

しかしこのような問題意識だけでは、村落の民俗社会の外部との交渉や近代という時間軸を取り入れた出来事のとりえ方ができないという限界も指摘される。このような限界があるという点では、やはり先にふれた議論、すなわち民俗や伝承が偏重されるがゆえに人間の「創造性」がないがしろにされてきたという議論とも重なる。笑いはきわめて創造的な文化的表現であり、かつ集団ではなく特定個人において顕現するという大前提が共有されていなかったことが、笑いに関する項目の不記載率を高めた要因であることが推察される。

百項目調査は、日本における民俗調査の基礎をなしたという学史的立場が強調されることも多く、その後の総合的民俗調査の項目づくりにも少なからぬ影響を与えたであろう。実際、『日本民俗学入門』や『日本民俗学大系』などの調査項目を見ても、ヒット率の高い項目が整序され、あるいは詳細に体系化されていったのに対し、不記載率の高い項目は、次第に姿を消していく運命にあったのかもしれない。じっさい、「笑わない人がありますか」に類する調査項目は、その後の体系化された民俗学のなかからは、ほとんど姿を消していった。それをいかに有意義な調査主題として練り直すかが、現在の課題である。

## 【注】

- (1) 展示ではいわゆる「山村調査」だけでなく、その後、1937年から1939年にかけておこなわれた「離島及び沿海諸村における郷党生活の研究」、いわゆる「海村調査」や、戦後あらためて継続された「離島調査」なども合わせて展示されている。このように「百項目調査」に関連する調査プロジェクトは多岐にわたるが、本稿では最初の「山村調査」に焦点をあてる。
- (2) ただし『山村生活の研究』の奈良県宇陀郡曾爾村其他の担当調査員は大間知篤三であるが、「採集手帖」37番の奈良県吉野郡野迫川村のほうは横井照秀の担当であり、ふたつを同一のものとみることとはできない。むしろ、複数の「採集手帖」が『山村生活の研究』四三番としてリストアップされているとみるほうが妥当かもしれない。
- (3) このほか奥付をみると、昭和11年度版だけは発行所が「民間伝承の会」となっているが、前の二年間は「郷土生活研究所」となっているなど、三年目の「採集手帖」は変更点が多いが、ここでは詳細な検討をする用意がない。

- (4) この三年間の対応は、細かく見ると、質問の表現に手が加えられている。いわゆるワーディングの変更などもかなり多く、田中宣一論文ではそれも詳細に拾った上での一覧表化がなされている [田中1985]。またとくに昭和11年度版では質問形式をかえる副項目や質問の意図を補足説明する注釈などがかなり書き加えられている項目も少なくないが、表3においては各年の調査項目を通観するための対応関係を見いだすことを主眼としたため、詳細の異同にはこだわらず、項目の主旨の一致を判断基準とした。
- (5) この富山県西礪波郡太美山村刀利の18番手帖は、第25項目以外にも全般にわたって石崎本人以外の筆跡での書き込みがあり、しかも昭和10・11年度の項目改編の下書きのような内容である。たとえば第36項目は、昭和9年度の印刷部分は「特に仲の悪い村、仲の良い村というのがありますか。○有れば其理由又は事情など承りたし。」であるが、そこに石崎以外の筆跡で以下の書き込みがある。A「村ト村トノツキアヒハアリマセンカ」、B「神楽ヤ山車ヤ花火ヲ相手ノ村ノ祭りノ時ニ出シ合フノ類」、C「隣村ニ対スル悪意アル俚諺ナド聞イタコトハアリマセンカ」。このうちABは昭和10年度の第36項目として、Cはさらにそれに加えて昭和11年度の第47項目として印刷部分に追加されている。また昭和9年度の第77項目は「この土地で今最も多く信心せられて居る神仏は何様ですか。」であり、昭和10年度に第73項目として移動した際には文言は同一であったが、昭和11年度の第83項目となったときには、上記の主文に続いて「▽その土地で有名な神仏や氏神の外に靈験の多いとか、祟りの恐しいとか云って村人の信仰、尊崇の対象となっているもの。▽行者が持って来たとか、突然夢の告げなどで現れるとかして、急に土地の人々に信仰される様になった神仏はありませんか。」という注釈（補足説明）項目が印刷部分に追加されているが、これもやはり石崎以外の筆跡で昭和9年度18番「採集手帖」に書き込みがある。これらはわずかな例であるが、この18番にはかなり多くのページに昭和10・11年度の改編の先取りと思しき書き込みがみられる。民俗学研究所の保管記録では「柳田國男の書き込みあり」とされているので、この別の筆跡は柳田によるものかもしれない。しかし田中宣一は三年間の質問項目の改編について、「柳田が直接タッチしたのは初年度（昭和九年度）の主項目百ヶだけであり、○を付したサブ項目や次年度以降のものにはかかわっておらず、それらは郷土生活研究所同人（すなわち木曜会の人達）の手になるものであったという」[田中1985: 36]と述べているので、柳田以外の木曜会のメンバーの誰かによる書き込みである可能性もある。なおこの書き込みは先取りではなく、三年間の調査項目が出揃ったところで、対応関係などを

明確にするため事後的に書き込まれたものである可能性も考慮したが、石崎本人の調査記録より右側の行に書かれている、つまり石崎の調査前に書き込まれたものであるため、この可能性は薄いと考へ本文では「パイロット・ケース」と表現した。ただし、なぜ昭和10・11年度の改編の素案がすでに昭和9年度の「採集手帖」の一冊に記されているのか、その明確な理由は現時点では判然としない。

- (6) たとえば岩本通弥は「民俗」を鍵概念とする民俗学の限界性を指摘し [岩本1998]、島村恭則は「伝承」に目を向ける民俗学は創造性を扱えないと主張している [島村2013]。
- (7) 小池淳一は近年の、といっても10年前だが、別の論考でも個人の問題を都市民俗と関連させて論じているが、最終的には、「個人に対する注目は都市に限らず民俗研究全体を蔽うものであり、またそこまで認識を広げていくことが都市民俗学の議論を経ることで得られた重要な意義なのである」 [小池2015: 62] と述べている。

### 【参考文献】

- 岩本通弥 1998 「「民俗」を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまったのか—」『日本民俗学』215, pp. 17-33
- 梅棹忠夫 1969 『知的生産の技術』岩波書店
- 門田岳久・室井康成(編) 2014 『〈人〉と向きあう民俗学』森話社
- 小池淳一 1989 「言語・伝承・歴史—日本民俗学における個人認識—」『族』10, pp. 20-31
- 2015 「都市民俗学はどこへいったのか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集, pp. 55-66
- 島村恭則 2013 「フォークロア研究とライフストーリー」山田富秋・好井裕明(編)『語りが拓く地平—ライフストーリー研究の新展開』せりか書房, pp. 78-98
- 成城大学民俗学研究所 2023 『民俗学研究所創設50周年記念特別展「採集手帖」の時代—柳田國男主導の共同調査の試み— 解説・目録』(民研報告第36号) 成城大学民俗学研究所
- 関一敏 1993 「しあわせの民俗誌・序説—地方学から内郷村調査まで—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第51集, pp. 313-347
- 田中宣一 1985 「「山村調査」の意義」『成城文芸』109号, pp. 26-81
- 橋本裕之 2015 『芸能的思考』森話社
- 比嘉春潮・大間知篤三・柳田國男・守随一(編) 1984 『山村海村民俗の研究』名著出版

- 福田アジオ 1984「解説—「山村調査」と「海村調査」—」『山村海村民俗の研究』（比嘉・大間知・柳田・守随編）名著出版
- 2009『日本の民俗学 「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館
- 2014『現代日本の民俗学 ポスト柳田の五〇年』吉川弘文館
- 松田陸彦 2015「人の地域移動の日常性をめぐる民俗学史的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集, pp. 11-34
- 柳田國男（編） 1975〔1928〕『山村生活の研究』国書刊行会
- 矢野敬一 1992「「山村調査」の学史的再検討」『日本民俗学』第191号, pp. 155-177
- 山田慎也 2011「山村調査, 海村調査における葬制の位置づけとその目的」『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集, pp. 265-277

（成城大学文芸学部教授, 成城大学民俗学研究所所員）